

ある日家に帰ったら、ベッドの端に自分が腰掛けていた。

「えっと……あなたは誰ですか？」

俺は意外なほど冷静に対応していた。しかし内心気がでなかったのは当たり前のことだろう。空き巣に入られている、というのは可能性としてまだあり得る。しかしそこにいたのは自分だったのだ。顔つきはもちろん、服装すら同じだ。冷静だったのは、驚いていなかったからというより、恐怖より困惑の方が強かったからだろう。

「見ての通りだよ」

それは親しげに話しかけてきた。ある意味で自分より自分と親しい人間はいないのだから当たり前かもしれない。いや、目の前の光景は当たり前とはほど遠いが。

「見ての通りって……じゃああなたは俺なんですか？」

「そう。とはいえ普通は自分というのは自分の外側にいないから、正確にはいわゆる自分ではないのかもしれないけど。そこは重要じゃないからね」

何やら訳知り顔でスラスラと説明してくる。だがその説明を聞いたところで何一つ理解ができない。わからないことが多すぎて何から聞けばよかわからなくなってくる。

「えっと……その、もう少し説明が欲しいというか……」

「うん、ちゃんと説明はするからさ、とりあえず荷物を置きなよ」

俺はそのときになってようやく、肩にかけていた鞆の存在を思い出した。

俺は今年社会人一年目で、もう半年以上は会社に勤めているが仕事に慣れたとは言いがたい。もともと仕事内容ではなく、帰宅後のぐったりとした疲労感には嫌になるほど慣れ親しんでいるが。大学生の頃から住居は変わったものの、仕事とは違って慣れたマンション一人暮らしだ。今日も帰ったらさっさと眠りにつきたいと思っていた矢先、それに出くわした。

俺は警戒を露わにしつつも荷物を所定の位置（といっても床の上に）やや乱雑に置く。そしてパソコンデスクの前の椅子に座り込み、準備はできたとばかりに視線を送った。

「準備はできたみたいだね。じゃあ話そうか。しかし君が何をわからないものだと思えているのか僕にはわからない。だからそっちらから聞いてくれるかな」

「……じゃあまず最初に聞いておきたいんだけど、これって幻覚だね」

さすがに実体がある存在として自分が現われたとは思えにくい。未知の技術で人間の複製が作られた、よりは目の前のこれが自分の完全な妄想あるいは幻覚だとした方がまだ納得ができた。

「試してみるといい。触ってみるんだ」

言われてみればその通り、触ればわかる。だが未知の存在に触れる

のは怖いので尻込みしてしまう。もし相手が変装の天才で、自分を殺そうとしている人だったらどうしよう、なんて突拍子もないことを思いついてしまうほどだ。

「怖いのはわかるけど、危害を加えるつもりならとくにそうしているし、そもそもこのままじゃどうにもならないからさ」

俺はそいつのやけに挑戦的でどこか無邪気な表情をどこか不愉快に感じた。言いなりになるのは癪だが、このまま何も調べず放置することできない問題ではあった。せめてもの対抗心として、急に椅子から立ち上がって一気に距離を詰めた。対するそいつはそのことがわかっていたかのように冷静だった。そこからスッと手を伸ばす。手応えがあったら嬉しいのかなかったら嬉しいのかわからなかった。いよいよ手が触れるという瞬間、相手の身体にぶつかることをイメージしていた俺の手は、するりとそいつの身体を通り抜けた。

「つまり……幻覚？」

「まあ、そういうこと」

何度瞬きしてもその幻覚は消えない。俺は熊から逃げる時のようにゆっくりと後ずさりし、再び椅子に座った。これが実体を伴う人間による不法侵入か何かでないとわかれば、今度は目の前のこいつの正体が気になってくる。

「つまりお前はドッペルゲンガー？」

「多分ね」

「自分でもわからないのかよ」

「君にわからないことは僕にもわからないよ」

「つまりお前は俺の記憶と思考から生み出されたものってことか？」

「そうなのかもしれない」

自分のことすらわからない俺のドッペルゲンガーは、しかし何でもないことのように自分の存在を評した。自分で説明するって言うておきながら、実は自分でもよくわかっていないらしい。いや、この場合俺がわかっていないと言うべきなのか？

「ドッペルゲンガーを見たら死ぬって聞いたことがあるんだけど」

「あー、まあ僕は俗説だと思うけどね。少なくとも僕は君を殺そうと思っていないし、殺す力なんて持ち合わせちゃいない」

触れられないのだから殺すも何もないわけだ。ひとまずドッペルゲンガーが直接的な死因となることはなさそうだ。ここで、さつきから会話していてドッペルゲンガーと俺に一つ違いがあることに気付いた。「ところでさつきから気になってたんだが、お前の一人称は『僕』なんだ」

「なんでだろうね。昔の君は一人称が僕だったからだろうけど」

段々とこいつのことがわかってきた。こいつは自分の潜在意識か何かで、ある種の二重人格と言うのが適当かもしれない。もしかしたら過去の自分から分裂したものなのかも。ただわからないのは、俺は自他共に二重人格らしき兆候は一切確認していない。であれば急にこいつが現われた可能性として考えられるのは……

「……これ、まさか脳梗塞の症状とか？ あるいは統合失調症の症状かもしれない」

脳梗塞の初期症状として、人が見えるといった幻覚が生じるという話を聞いたことがある。そして自分以外が自分の振る舞いをしているのを見るというのは、統合失調症の患者にもあることだ。

「あいにくと医者じゃないから僕にもわからないよ。どっちにしても医者には一度かかった方が良くと思うけどね」

他人事だと思っているのか、俺のドッペルゲンガーはやけに落ち着いた様子だ。俺はというと、非現実的な光景を前にして、医者に行くためにどうにか休みをとらないといけないという現実的な思考を繰り返していた。

結果として休みはすぐとれ、幻覚が見えた日の翌日の午後には神経外科にかかっていた。幻覚症状の原因として心因性のものもあるが、一番急を要するのが脳梗塞や脳腫瘍の場合なので、こちらを選んだ。

ちなみに上司に「幻覚が見えたので医者に行きたいです」と言ったら、さすがに「できるだけ早く行ってこい」と言われた。俺が逆の立場でも同じことを言うと思う。内容はぼかしたものの、幻覚なんてやばいものが見えているなら仕事を任せられるものではない。受け答えはちゃんとしていたこともあって、昨日の仕事の残りを片すことくらいはさせてもらえたが。

人が多いせいかやけにボーツとする暖かさの待合室でうつらうつらとしていると、看護師さんに名前を呼ばれたのが聞こえて、急いで診察室に向かった。中は白い印象を受けるいわゆる診察室だった。ファイルを収める棚の手前側に診察用のパソコンがあり、その脇に患者への説明用と思われる脳の模型があった。

「こんにちは。よろしくお願ひします」

「こんにちは。どうぞこちらの椅子にお座りください」

担当の先生は思ったより若く、三十代くらいに見える男性だった。

今日も既に何人もの相手をしているだろうに、その疲れを見せずこちらにゆったりと明るく話しかけてくる。

「本日はどのような症状で来られましたか？」

「はい、端的に言うくと、昨日の夜に幻覚が見えました。その、言いにくいんですが、自分とそっくりな」

「なるほど。その症状はいつからですか？ 今もありますか？」

「昨日の夜家に帰った頃……あー、十九時頃ですね。家に着いたときベッドの上に自分そっくりなものが腰掛けていて、お風呂から上がったら消えていました」

「わかりました」

先生はパソコンに何やら症状をカタカタ打ち込みつつ、原因を探るべく質問を考えているようだ。

「他に何か自覚症状はありますか？ 例えば頭痛とかめまいとか、どんな小さなことでも構いませんので」

「えーっと、身体症状は特にない気がします」

「そうですか。ではご家族に脳のご病気をされた方などは……」

こうして俺は一通り質問に答えていった。そしてそれだけではわからないということで、頭部CTまで撮ることになった。しかしそれでも結局異常は見つからなかった。脳腫瘍なんかの深刻な病気じゃなかったのにはホッとした。先生曰く、統合失調症か解離性同一性障害の可能性があるということで、精神科にかかった方が良さかもしれないという結論になった。紹介状を書いてもらってその日は帰ることになった。まだ何も解決していないが、最悪の事態ではなさそうだ。

会計を済ませた俺は、〇〇を撮ったためか思ったより高くついてしま

った診療費のことを考えていた。特に今買いたいものがあつたわけではないが、財布が軽くなるのは喪失感がある。

いつの間にか夕方には冷える季節になった街を歩く。今日はどこかで外食して帰ろうか。……そして例の幻覚は今日もまた現われるのだろうか。

「……ただいま」

「おかえり。つて言うのも変な気分だけどね」

俺は不眠そうにドッベルゲンガーに帰宅を告げる。何となくいる気がしていたから、そこまで驚きはしなかった。昨日と同じように、しかし昨日よりはスムーズに荷物を片付け、またドッベルゲンガーと会話すべく椅子に座る。

「今日医者に行ってきたんだけどさ、脳に異常はないから精神病の可能性が高いってさ」

「そうみたいだね」

「ああそうか、知ってるのか。まあそれはいい。精神科に行くのは大体一ヶ月後で、それまではストレスをためない生活を心がけるという話をされた。それともう一つ、この幻覚が心因性のものなら、その中にヒントがあるかもしれないから、何か思いつくことがあつたらメモしろと言われてきたんだ」

統合失調症の場合幻覚と会話するのは妄想を悪化させる可能性があるから避けるべきだし得るものはないと言われた。しかし今の俺の症状はどちらかというと解離性同一性障害、いわゆる多重人格に近いらしい。この場合別人格——今は幻覚として現われている——の言動に

は症状の原因が隠れていることが多いのだとか。だから考えたこととはなるべく記録しておくとか治療がスムーズになるかもしれない、のとことだ。もっとも専門の精神科の先生に診てもらうまで迂闊なことはすべきでないとか釘は刺されたが。

「それで、何か思いついた？」

「いや」

そう、こうは言われたものの、正直なところ自分ではよくわからないのだ。だから俺はこうすることにした。

「だからお前と会話してみようかと思って」

「……それって医者に止められてるんじゃないの？」

ドッベルゲンガーは「ちゃんと考えた上での結論なのか？」とでも問いかけるかのように言った。というか医者にやんわり止められていることは言っていないはずなのにやはり把握しているのか。情報が知らず知らずのうちに共有されている感覚はなかなか慣れない。

「確かに危険はある。そして自分が高確率で精神病だと診断されて、自分の判断にも自信はない。でも……」

「でも？」

「……こんなやつが目の前に居ても調べないでいるなんて俺には無理だ」

「言えてるね」

これが罵詈雑言を吐いてくるとか、甘ったるいことを耳に囁いてくるとかだったら話は違っていた。だがれっきとした一人格のように振る舞う存在が目の前にいるなら、何か対話の中でこの症状の原因を見つけられるのではないか、と期待してしまうのだ。あとは単純に、無視

するのが難しい。

「正直不気味だからできるだけ見ていたくはないけどさ」

「はっきり言われると傷つくよ」

そう言いながらドッペルゲンガーは軽くニヤツとする。妙にむかつく仕草だ。

「とはいえ呑み込まれないように話題は限定するつもりだ。立て続けにお前の考えを聞いていると症状が悪化しそうだ」

「僕の考えって君の考えじゃない？」

「そうだな。でもそういうことを言いたいんじゃないってこともわかってるだろう？」

「どうやら僕の扱い方がわかってきたみたいだね」

会話の主導権は俺が握っているはずなのに、こいつの言い方を聞いているとどこか弄ばれているように感じてしまう。いや、こいつが無意識の反映だとしたらむしろ会話をリードしているのはあっちなのかもしれない。

「色々と言いたいことはあるが、一番気になるのはその話し方だ。昔の俺が親しい人と話すときのそれと同じだ。口調だけじゃなくて、受け答えの内容も俺の考え方にそっくりだ」

「……それが本日の議題ということでいいのかな」

「そういう切り返し方もな」

一呼吸置いて俺は続けた。

「お前が俺の思考によって生み出されたものであることは、もはや疑っていない。そして多分過去の俺の何らかの体験に関係しているというこも。一方で俺はそっちが言おうとしていることを事前に感じら

れてはいない。感覚としては自分の記憶をもった他者が話しかけているように感じる。自分の中の思考なのに、それを自分ではそう思考していると感じられない」

考えるに、この幻覚は夢に近いもののだろう。確かに自分の脳が生み出したものだが、それはときに制御できないし、夢の内容は自分が作っているという感覚を持ってない。例えば夢の中で他者から思いがけない言葉を受けることがある。それは確かに自分の中で生み出された言葉なのに、他者から言われたようにしか感じられない。その言葉が生み出される様子が自分では知覚できないことがあるのだ。……まあこんな鮮明なのは普通じゃないだろうが。

「だからこれは自分の問題だが、俺の能動的な思考だけではどうにも解決できないことだとも思うんだ。だからどうにかしてお前が自分の何なのか理解しないとイケないんだ。自分の中にあつて自分では取り出せないものを、どうにか取り出さないとイケない」

俺はドッペルゲンガーの方に向き直る。あっちの方は何を考えているかわからない無表情でこちらを見ていた。

「なるほど、自分である種の退行催眠療法をしようとしているのか」

「ああ、そんな言葉を俺は知っているんだな。今思い出したよ」

論理的に考えてこの語彙は自分の中にあつたものののだろうか、言われたら聞いたことがあるという程度にしか覚えていない。自分で引っ張り出すことはできないほど深いところに眠っている薄い記憶だ。

「もしお前が答えを教えてくださいというならそれが一番手っ取り早いんだけど……」

「まあお察しの通り、僕はそういう存在ではないんだよね。色んな質

問や観察をしてどうにか輪郭を浮かび上がらせるといことになると思うよ。それに、もし僕が答えを持っていたとしても解決しないかもね」

「というのは？」

「納得するっていうのは極めて個人的な営みだから、かな。答えそのものよりも、答えに納得できることに意味がある」

「……よくわからない」

「仕方ないよ。夢みたいなものだし、ちゃんと論理的な表現になっている保証はない。妄言からたまにヒントが得られるかも、くらいの気持ちでもいいんじゃない？」

「まあ、それも含めて今後の課題か」

「そうだね。じゃあ今日はあと何を話そっか」

「いや、今日はこのくらいにしておく。なんか待合室でウトウトしたせいか妙に眠いし疲れた。風呂に入ったら寝る」

「つれないなあ」

こうして、俺とドッペルゲンガーの奇妙な会合は始まった。

「君はいつも僕のことを幻覚だって言うけどさ、じゃあ本物って何なのかな」

「さあ？　少なくとも本物だったら触れるんじゃない？」

「仮説の一步目としては悪くないね。でもそれだと空気は本物じゃないってことにならないかな？」

「空気は空気抵抗があるだろ」

「じゃあ手の分解能では検知できないほど希薄だったら？」

「意地悪だな……というかこれ定義の問題でしかないだろ」

「『でしかない』とは聞き捨てならないね。定義は大事だよ。定義を考えることこそが問題である場合だって少なくない」

これはそんな日々が続いて三週間くらいが経過したときだ。相手が自分というのもあり、割と抽象的な内容でも何となく意思疎通がとれている（と表現するのは果たして正しいのだろうか）ので、こんなトークテーマになることもしばしばだった。

ドッペルゲンガーは毎日出てくるわけではなかった。どういう日に現われるのか法則性を見つけようとしたが、よくわからなかった。ただ現われるときは何となく現われる前に来そうな予感があった。だから最初に会ったときも驚きでひっくり返るようなことがなかったのだろう。

だが概ね週に三、四回は出てきた。そして視界から外すといつの間にか消えていた。だがずっと見ていたら消えないのかと思って試したところ、ドッペルゲンガーの方が動き出し、扉を通り抜けるかのようにならなくなったこともある。目の前で急に消えるといった不自然な消え方はしないようだった。

「そもそも物を見るのも夢を見るのも脳が作った映像を認識しているだけだしね」

「物を見るときは目から来た信号を見ているんじゃないのか？」

「それそのものじゃなくて、それを元に生成されたものを視覚として感じているというのが正しいかな。網膜への刺激は視覚のきっかけになるけど、それ自体は視覚という感覚にはならない」

「……俺ってそんなに物知りだったんだな」

「忘れてるだけさ」

時々、こいつが本当に自分の中で生み出されたものなのか疑わしく感じる時がある。あるいは、俺が実は記憶喪失で、その部分が自我を持った存在と思った方が納得が行く気すらする。まあ抑圧された記憶や感情が原因なら、この解釈もあながち間違いじゃないか。

「じゃあ何をもって本物と幻覚を区別すればいいんだ？」

俺がそう聞くとドッベルゲンガーは「んー」と少し考え込む素振りを見せた。右手で頭の後ろを軽くかくその素振りは、俺が考え込むときのそれと同じだった。

「外部からの感覚刺激がないのに知覚が発生するとき、それは幻覚と言うべき、かな？」

「夢を見ているときも、幻覚？」

「そうなるんじゃないかな」

「まあもつともらしい定義か」

会話が一段落して、背もたれに体重を預ける。こんなにはつきり見えているドッベルゲンガーが幻覚なのだと思うと、何を信じていいものかわからなくなる。そもそも外部から刺激があるかどうかを判定できる人間がいなければ、それが幻覚だと断定はできないはずだ。だから自分一人しかいなければ、それが幻覚かそうでないかを判定はできないんじゃないか？ いや、他の誰かがいたとして、その人が見ているそれが幻覚でないということは、一体誰が確信をもって言えるのだろうか？ そんな終わりのない思考に陥りそうになった俺の耳に、独り言のような言葉が入り込む。

「幻覚ほど確かなものはない。外部からの刺激を必要とせず、ただ己の脳が『そこにあるべき』と思っているからそこにあるように認識する。現実すら必要としない究極の感覚だ」

「……」

「世界とは現象のことで、意味とは現象の解釈だ。世界という現象は己の外側にあるが、世界という感覚は己の内側にある。そして己の内側には世界以外もある」

「それはどんな結論に着地するんだ？」

「まあそう急くなよ。でももったいぶるものでもないか。変えられない世界現象じゃなくて、変えられる世界認識を変えろってことだ」

「散々飾った言葉を放っておいて、言うことが『全ては自分次第』か？」

「それもあるけど、重要なのはこの裏の意味だ」

「裏？」

「世界は同じでも、見え方は変わってしまうってこと。変わる幸福以上に、変わってしまう不幸の方が多いもんさ」

どこか厭世的な目をしたドッベルゲンガーを見つめる。その目はこちらを見ていないのに、妙に胸騒ぎがした。

ある日の仕事帰り、なぜかそのまま帰宅する気にはなれなくて、駅前の変わったモニュメントが見えるベンチに座り込んでいた。夕飯はどこで食べようか、とぼんやり考える。誰かの気に障らないようにどこでもない場所を見つめていると、視界の端にこちらに近づいてくる

姿を見つけた。もしかしたらただの勘違いかもしれない、と思ってそちらを向けないでいると、あちらから話しかけてきた。

「もしかしてお前、洋一か？」

聞き覚えのある声に反射的にそちらを向くと、想像通りの顔が目に見えた。

「直樹？」

「久しぶり。会えると思ってなかったよ」

そこには楽器ケースを背負っている、かつてと変わらない直樹がいた。

「会えてうれしいよ。けどなんでここに？」

「ちよつとこのライブハウスに用事があつてね。そっちは？」

「仕事帰りさ。職場が近いんだ」

「この辺だったか。それよりもさ、これからどこ飲みに行かないか？」

「言われなかったらこっちから言うつもりだったよ」

久しぶりに知己に会った気恥ずかしさと、驚きと、そして嬉しさを感じながらかつてのように言葉を交わす。

直樹はつい去年まで俺が所属していたバンドのベースだった。そして、直樹は今バンド活動をしている。

「それで、そっちは最近どうなんだ？」

「……こっちは大して変わったことはないよ。もう半年は経ったのにまだわからないことだらけっていうのを除けばね」

一瞬直樹に幻覚のことを打ち明けようか迷ったが、せつかくの再会の空気を壊したくなくてやめることにした。できるだけ人に愚痴は言

いたくないし。

「ごく一般的な会社員からすると、そっちの波瀾万丈な人生の方が気になるよ」

茶化しながらそっちはどうなのかと聞き返すと、直樹は軽く笑ってこう返した。

「ご想像の通りここしばらくは波瀾万丈な日常だな。でももうちょっとしたら安定するかもしれないんだ」

「というと？」

「レーベルに所属できることが決まった」

「それって凄いことじゃないか？」

俺は素直に賞賛する。かつて音楽の道に進むことも考えていたからこそ、そのハードルの高さは理解しているつもりだ。

「嬉しいは嬉しいんだが、もう安心かと言われるとまだ不確定要素が多くてな。やることは山積みだ。それにまだスタートラインだし、ある意味で手段だから」

「……そういえばそうだったな」

俺が思い出したのを見て直樹は軽く頷く。

「たった一つでもいいから、俺が死んでも歌い継がれるような、そんな曲を作りたい」

そんな音楽家にはありふれたような願いは、しかし一握りの人しか叶えられないものだ。

「子供っぽい夢だけだね」

そう自嘲する彼のことを、俺は笑わない。叶わないかもしれない夢を追うことほど怖いものはない。夢が叶わなかったことを具体的に想



像できる大人だからこそ、子供っぽい夢を抱えていることには重みがある。

「ところで洋一は最近音楽やってる？」

若干の気恥ずかしさからか、直樹は会話の流れをこっちに向けようとしているようだ。

「あー……いや、最近あんまり楽器は触ってないな。その……忙しくて」

そう答えると直樹は心なしか寂しそうな顔をした。

「そっか。ちよつと残念だけど会社員になるとそんなもんか」

「……うん」

俺は高校でも大学でも軽音部だった。ギターに出会ったのは中学生のときだ。今思えば何か格好いいという理由で始めたような気がするが、そこから音楽全般にはまっていた。そしてそのまま高校生、大学生と音楽を続けていった。音楽関連の色々なことに触れていたが、やつぱり特別好きなのはギターを弾くことだった。

俺はギターを始めるまで、特にこれという夢はなかった。取り立てて運動ができるわけでもなく、勉強ができるわけでもない。漠然と人を救う格好いい仕事というイメージから消防士になりたいなんて言っていた時期もあったが、今思えば別になりたいという程でもなかった。友達とゲームをすることが楽しみな子供だった。

中学生のときギターに触れて、格好いいし楽しいと思った。そんな些細なきっかけだが、ずっとその趣味に明け暮れているうちに、生まれて初めてのちゃんとした夢になった。俺はギターを弾いていた。俺

はギターを弾くのが好きだった。

自慢じゃないが、高校生の頃には周りから音楽の道に進むつもりなのかと聞かれるくらいには上手かった。だが上手かったからこそ、上の存在がわかっていた。……いや、「音楽の道に進むべきだ」と言われるには至らなかつた時点で、土台無理だったのかもしれない。いずれにせよ、俺は音楽の道を選ばなかつた。趣味で楽しむだけだと思っていた。でも、趣味だと思うようになってから楽器に手は伸びなくなっていた。そして気付けばここ一ヶ月はギターに全く触れていなかった。なぜか――

「あれだけの才能が、と思わないでもないが」

「よしてくれよ。このくらい業界にはいくらでもいるだろう」

「……まあ正直に言うと思うだな。俺は井の中の蛙だったって今なら実感を伴って言えるよ。才能のなんたるかを見せつけられる日々だ」

「多分俺が思っている以上にそうなんだろうな」

ある意味で実力の否定となる言葉だが、俺はすんなり受け入れられた。

「でもな、逆に言えば俺くらいでも音楽をやってるやつはいるし、できるんだよ」

直樹はビールを飲み干して空になったグラスの取手をいじりながら話す。

「俺は運が良かったと思う。それはある。でも挑戦したら案外何とかなるのかもな。努力をやめたらおしまい崖っぷちではあるが、背水の陣ってやつか」

「……そういうものか？」

「さあな、俺一人の経験だからみんなそうかはわからない。でも俺はそう思ってる」

俺は返事の代わりにビールを流し込む。苦みが舌から喉に抜ける。

「でも洋一はすごいよ。俺なんて未だに生活はフリーターみたいなものなの。それに多分俺みたいな人間は会社勤めなんてできないし」

「いや、それこそやってみれば何とかなるってやつだよ」

「こりゃ一本取られた」

俺は直樹に合わせて無理矢理乾いた笑いを浮かべる。幸いにも、直樹はそれに気付かない。なんで急に胸がうずいたのか、自分でもわからなかった。

「でもやっぱり俺は洋一に音楽続けて欲しかったな。いや、俺のわがままなだけどさ。まあ社会人ともなると忙しいか」

「……ああ、そうだね」

違う、と心の中で言う。自分で言ったことだが、忙しいのが理由じゃないはずだ。忙しくはなったが、それでもギターを一日三十分弾くくらいの時間はとうろと思えばとれた。でもそうはしていなかった。なぜか――

「まあ洋一が自分で選んだことだしケチはつけまいよ」

違う、という言葉が喉から出かかった。俺は当時、音楽の仕事ではなく一般就職を目指すという選択を正しいと思っていた。自分にとって、趣味としての関わり方が心地よいのだと思っていた。でも今ならわかる。音楽の道だと将来が不安だったし、何より一生を音楽に捧げる覚悟がなかったんだ。音楽しか好きなのがないのに、それに身を捧げ

ることすらできなかったんだ。なぜか――

いや、わかった。思い出してしまった。気付かないふりをしていただけだった。確信はもてない。でもその可能性が脳裏にちらつくだけでどうしようもなく怖かった。でもだめだ、もう自分を誤魔化せなくなってしまう。

俺は音楽に飽きてしまったのかもしれない。

ただ才能が足りないとかお金が足りないとかの理由で夢を諦めないといけないとわかってしまっただけならまだ良かった。でも俺は挑戦すらしなかった。もしかしたら目の前にいる直樹みたいになれたかもしれないのに。でも成功か失敗かは本質じゃない。もっと根本的なところだ。

選べたのに、選べなかったんだ。憧れを捨てようとして捨てたのに、やっぱり心のどこかでは憧れていた。捨てたものこそが大事だった。その消極的な選択の末路として、俺は安定というものを手にした。大事なもの全部なくなって、安定だけが残った。

あの選択が分水嶺だったのかもしれない。もしあのとき音楽を選んていれば、俺はまだ音楽を好きでいられたのだろうか。それともやっぱりどこかで自分が飽きていることに気付いてしまうのだろうか。

何に苦しんでいるのか自分でもはっきりとはわからない。でも何か決定的に選択を間違ってしまった気がする。そして今俺が、楽しくないからギターを弾いていないということがわかってしまった。そんなこと、認めたくなかった。

でも、気付いてしまった。

家に着くと、力なくベッドまで歩き、倒れ込む。天井についている部屋の明かりが眩しい。電気を消す気力も出なくて、目を閉じる。火照った身体がさっきまでお酒を飲んでいた事実を思い出させる。そして過去にぼんやりと思いを馳せる。

俺はギターが好きだった。ギターが楽しかったから、何かあっても平気だった。迷ったら戻ってこられる場所があると思うだけで、退屈な人生も乗り切れる気がしていた。そういう、自分の人生の核となるものを見つけられたと思っていた。

ただ趣味に飽きることは違う。自分で自分の生き方にギターを複雑に絡めた後でギターだけ抜き取ったことで、不安定で歪な今だけが残った。おまけにその原因となったのは自分の選択だった。とんだ独り相撲だ。

あの選択は間違っていたのだろうか。俺はどれだけ苦労してでも音楽の道に進むべきだったのだろうか。俺にも夢はあった。漠然としたもののだが、人を救えるような曲を作りたいかった。それなら今の時代、音楽を仕事にしなくてもできると思った。でも後になってから気付いてしまった。俺が好きな音楽は、誰かと演奏して、その場の誰かに届けることだった。いつの間にか、そうになっていた。

それでも選べなかったのではなく、選ばなかったのだと思いつつもとしたこともあった。今の人生の方が望みに近いと、そう思おうとした。でもやっぱり自分を騙しきれなかった。どうやっても叶えられな

かったのだと納得しようとした。でももしかしたらできたかもしれない。結局俺は怖くて挑戦すらせずに諦めただけだった。そしてそのことがどうしても僕を苛んでいた。

いや、始めから間違っていたんだ。妥協してもいいと心のどこかで思っていた。妥協できる程度でしかないものを、自分の人生の軸にしようとしていた。それに気付いてしまったとき、俺は俺が心底嫌になつてしまった。あれだけ好きだったのに、自分の中で大事な信念と言うべき何かを蔑ろにしたのだと自覚してから、急速に冷めていった。

自分のせいにも周りのせいにもすることなく、かといって全力を尽くすわけでもなく、自分が信じて歩んだ道を自分の手で壊して、でもその壊れた道の欠片を必死でつなぎ合わせようとして。そうして気付けば今の袋小路だ。

じゃあ俺はこれからどうすればいいんだ？

そんな思考がグルグルと巡って、どのくらいの時間が経ったのだろうか。起き上がる気力もなく、かといって眠りにつけるような気持ちでもなかった。そもそもので起き上がらないといけないんだって……？

最悪な気分だ。何も責めるべきものがない。ただ決定的に何かを間違つたという感覚だけが身を苛む。恐いのか苦しいのか悲しいのかよくわからない。どうすればいいのかわからない。どういう感情を抱けばいいのかわからない。

そのとき足下にふわりとした感触があった気がした。

「そのままいい。目は閉じたままで」

何も答える気力が湧かなかった。

「今は、最悪な気分でもいい。今が幸せでなくてもいい。後悔していてもいい。元気なんてなくていい。笑ってなくていい。生きたいと思っていなくてもいい。……人にはそういう言葉が必要ときだってある」

そうか、別に咎められることなんてないんだ。

「僕は何もしないし、何もできない。だから僕はただ君が苦しむことを許そう」

世界が放っていた眩しい圧迫感のようなものが消え、暖かい闇が側にあった。また目を開けるとときまで、そうしていた。

それから一週間。幻覚が見えるようになってから約一ヶ月、ようやく精神科の予約の日だ。この一週間、仕事は思いのほか普通にできた。だが何をしていてもスツと冷めてしまうようになった。どんな楽しい瞬間にも、叩きつけるかのように憂鬱が差し込んでくるようだった。

幸か不幸か、この一ヶ月の間でこんな状態になった原因はわかった。でもわかったからこそ、こんなものをどうにかできるものか、という不信任に近い思いが芽生えつつあった。よく知らないが薬が何かで無理矢理抑制できるのだろうか。

担当医は白髪の落ち着いたお爺さんという印象だった。妙に落ち着いた心持ちで正面の椅子に座る。

「紹介状は拝見いたしました。しばらく時間は経ちましたが、症状の方はいかがですか？」

「幻覚は相変わらず見えます。毎日ではありませんが、はっきり見え

ます」

「なるほど。他に何か変わったことはありますか？ 例えば抑鬱的な気分だったり、無気力だったり、あるいは人と会話していて違和感があつたりとか」

「実は幻覚が見えるようになってから色々考えまして、この間何か原因かもしれないものを見つけました。その……その影響でこしばらく気分が優れず……」

「ゆっくりでいいですから、できそうなら私に話してください」

俺はごちゃごちゃした考えを、ごちゃごちゃしたまま言葉にしていた。誰かに悩みを打ち明けると少し気分が良くなると聞いていたが、残念ながら俺の場合はそうはならなかった。

「お話を聞かせてくださってありがとうございます。今後何かあれば今回みたいにお話ください。きっと症状改善の助けになります。さて、そろそろ今後の治療方針についてお話していきます。よろしいですか？」

「はい」

思えばこんなに自分の気持ちを人に話したことなんてなかったかもしれない。その気恥ずかしさを治療のためという思考で塗りつぶし、俺は話を聞く姿勢にうつる。

「洋一さんは解離性同一性障害でしょう。それも幻覚を併発する珍しいケースです。それと、まだ軽度と言えるくらいに留まっています、鬱病の傾向も見られます。複雑なことに、解離性同一性障害により鬱病に蓋がされ軽減されている可能性があります。しかしこれは一時し

のぎにしかありません。まず間違いなく、このまま放置すれば鬱病になります」

「……そうですか」

俺はとうとう精神病にかかってしまったのかとため息をつきつつ、やっぱり自分は異常な状態だったのか、とどこか安心してしまう。

「解離性同一性障害って、家庭内暴力とか、親しい人の死とか、そういう強烈な原因でなるものじゃないんですか？　それがこんな俺の場合みたいな自分の中だけのつまらない感情で起こるなんて……」

「いいえ、それは違います」

医者はびしゃりと言い放った。そして幾分か柔らかい口調で、しかし熱心にこう続けた。

「確かにそういう人が発症する場合は多いです。しかし出来事としての規模と、苦しみの度合いとは必ずしも一致しません。あなたはこんな理由で、と思っているかもしれませんが、どんな理由でも人は傷つくんです。苦しみを矮小化したり、否定したりする必要なんてありません」

「そう……ですね。そうなのか……」

言いよどむ俺に、医者は仕切り直すかのようにこう言った。

「ええ、自分の示すサインには気付いてあげてください。……では治療の話に戻ります」

「はい」

「まず抗鬱薬を処方します。適切な薬かどうか判断するため、定期的に通院してください。しかしあなたの場合は根本的な原因を解決しないといけないでしょう。……一つお聞きしたいのですが、幻覚と会話

はよくされるのですか？」

「ええ……その、はい。あまり良くないかもしれないと思うのですが」

「……そうですか。難しいところですが、基本的にはよくないとされています。考えを固定してしまう原因になり得ますので。特に、極端に都合のいいことや都合の悪いことを言う場合は危険です。いずれにしても、幻覚の言うことにはまず何かしらバイアスがかかっていると疑ってください」

「……わかりました」

「とはいえ無理にとは言いません。それが心の平穏のために必要な場合だつてあります。重要なのは、バイアスを取り払って、視野を広く、フラットに考えることです。そのために、今の状態になる前のことを探ると良いかもしれません。日記か何か、以前つけていたものはありますか？」

そう聞かれて俺にはピンとくるものがあつた。

「あります。その、高校生の頃から毎日ではないのですが色々書き留めていたものがあります」

「そうでしたか。それがすぐに問題の解決に繋がるとは限りませんが、自分を知るために役に立つかもしれません。これに限らず、できるだけ自分を受け入れるための土壌を作るように努めてください。それが治療のための第一歩です」

自分を受け入れる。それができたら苦労しない、と言いたくなることだが、実際それができないと解決しないのだろう。どうなれば受け入れたことになるのかもよくわからない。だが、すべきことは提示さ

れた。

「色々言ってしまったが、焦らずゆっくり治療していきましょう」

「わかりました。よろしくお願いします」

拒否感も安心感もなく心情は平坦だったが、少なくとも何かすべきことがあるというのは気を紛らわせられて良いな、とだけ考えていた。

「……あった」

家に着いて、早速本棚を漁った。そこには俺の音楽ノートがあった。

音楽ノートと銘打っているが、実のところ日記や雑多なアイデア帖も兼ねていた。何年分か積み重なったそれは、ノート五冊分あった。

なんとなく二冊目を取り出し、途中のページを開く。そこにはギターテクニクやその練習記録、歌詞のアイデアはもちろん、その日嬉しかったことや腹が立ったことなんかも綴られていた。

そうだ、思い出した。当時考えていたことは全部、当時の俺<sup>僕</sup>にとって音楽に統合されるべき事柄だったんだ。日々が全て音楽に埋め込まれていて、だから日々を乗り切れていた。

ページを進める。どうやらこのときちょうど受験期だったらしい。当時の記憶が蘇り、不安や悩みが手に取るようにわかる。思考のトレンドが手に取るようにわかった。

三冊目に移ろうとして、これなら最初から読み直そうと思い直した。最初はどうな思いでこのノートを書き始めたのだろうか。そう考えていたら、お腹が鳴った。ご飯を食べられるのは良い兆候だ。もしかした

ら、今の自分から思考が離れて少し楽になったのかもしれない。読み進めるにしても、夕飯を食べてからにしようか。

結局ノートを全部読み終えるのにあれから一週間もかかった。相変わらず仕事もあったし、何だか読む気になれない日もあったせいか、思っていたより時間がかかってしまった。

ノートには色々なことが書いてあった。今の自分からすれば子供っぽい理論だと笑ってしまうような、鬱憤や極論もあった。でも不思議と馬鹿にする気にはなれなかった。ドッペルゲンガーの口ぶりが想像できるからだろうか。それともそれらの本質が願いだっただけだろうか。それらは心を揺らす力を秘めていた。大人になった俺は、どこか眩しいものを見る気持ちでその言葉を見ていた。大人になるということは、理想が叶わないことを知り、それ故傷つかないようにあらかじめ理想を否定することなのかもしれない。

ノートを読み進めると、四冊目くらいから悩みが今に近づいてきていた。不満ではなく、不安が多くなっていた。次第に後悔ばかりが積み重なっていった。万能感を内に秘めていた時期は終わり、過去に問いかけていた。

さらに読み進めると、内容に現実感が増していく。ちょうど就職した頃だろうか。大人になった、ということなのだろう。自分や社会に抱いていた幻想がゆっくりと打ち砕かれていく。そして、ギターという今まで揺らがなかった理想にも亀裂が――。

さらに自分の選択への後悔。それは今よりももっとごちゃごちゃしていて、何が主要因なのかわからない。だがこれまで支えとしていた

ものへの懷疑は、じわじわと俺を蝕んでいた。そこから頻度が落ちていった記録は、五冊目の半ばでついにバタリと止まっていた。

俺は一週間をかけてこれらの内容を咀嚼した。その間ドッペルゲンガーは現われなかった。もしかしたら、ノートを読んでいる間はドッペルゲンガーなしでも自分の過去と十分向き合えていたからかもしれない。不思議と寂しさはなかったが、久しぶりに一人で考えると思考がまとまらないことに気付いた。だから俺は、五冊目のノートに今の心象を書き記していった。それは少しずつだが、積み重なっていった。

「やあ、久しぶりだね」

「……ああ、久しぶり」

明日に二度目の通院を控えていた夜、ここしばらく姿を見せていなかったドッペルゲンガーが現われた。驚きは、なかった。

「悩みは解決できたのかな？」

答えがわかって聞いているような問いかけに、俺は軽く笑ってから返す。

「そんなわけではない。考え方一つで解決するようなら、お前みたいな存在の出る幕はないさ」

「言うじゃないか」

今ならわかる。ドッペルゲンガー僕が現われてくれたおかげで負の感情に蓋がされていた。それは必要だったから、現われたのだ。それは猶予を与えてくれた。だが、その猶予は永遠ではない。

「俺は選択と後悔に振り回されてこうなった。まあそれでもないけどな」

俺は文字通り自分に語りかけるかのように、話し始めた。

「だけど、そんな悩みは実はありふれていたんだ。これまで幸運にも出くわさなかっただけで、この世界にはそんなものいくらでもあった。色んな要因が積み重なって致命的になったかもしれないが、よくあることだった」

目の前の僕は何も言わない。

「そんな選択は誰にだってある。そんなことはわかっているんだ。でもそんな事実は重要じゃない。感じているのが自分だから、何よりも大きく見えてしまうんだ。ありふれた悩みかもしれないけど、俺にとっては人生で一番苦しかったよ。それが自分にとっての意味しかないとしても。そうして感じられる大きさが全てなんだ。まあそれに気付いても、解決はしなかったんだだけだね」

「そうか」

「でも、夢は叶わなくてもいい、叶えなくてもいいって気付いたら、少しは楽になったかな。言葉の上で言うのは簡単でも、なかなか思考に伴ってほくれないけどね」

本当の意味でそれを受け入れることがどれだけ難しいか、俺は身をもって体験した。

「夢は叶わなくて当たり前って、そう気付くところがスタートラインなのかもしれない、って思った。それは単に言葉の上じゃなくてき、実感として得られないとわからないものなんだ。叶えなくてもいいって

思えるようになったとき、ようやく前に進めるんだ」

きつと、夢が叶わないって気づいてからの方が、人生は長い。決定的に間違った決断をしてしまった後でも、人生は続く。不本意なことに。

「それでも人は前に進まなければならぬ。……いや、立ち止まる選択肢は与えられていないと言ってもいい。人は、生きている限り生きていないといけないんだよ。例えば歩みを止めたとしても、今生きているということは、生きている限り止められない。それは苦しみであり、救いだ」

なんて、自分で言っているがまだまだ悩みは大きい。正しさだけで人が救われることなんて、結局ないんだ。だから――

「一つ、変わった考えがある」

「……話してみよう」

俺は一息吸って、続けた。

「現象と認識について」

それは、いつかの僕との会話に現われたことだった。

「以前君は『幻覚ほど確かなものはない』って言ったけどさ、やっぱりそうじゃないと思うんだ。だって、いつだって幻覚の元になるのは現実の体験だから」

僕は頷いて、続きを促す。

「確かに世界の見え方は自分次第かもしれない。でも、その見え方って決して自分の内側の変化だけで決定されるものじゃないはずなんだ」  
俺は言葉を探しながら、続ける。

「悲しいことがあったとき、時間が解決してくれるってよく言うけど

さ、あれと同じだよ。どうしようもないことって、認識じゃなくて、時間をかけて現実の方を変えていくしかないんだ」

本当の意味で受け入れられるようになるためには、言葉を弄しているだけじゃだめなんだ。それが能動的な行動であれ受動的な環境の変化であれ、外側の変化がいるんだ。少なくとも今は、そう思っている。

「……『現象が認識に先立つ』それが、君の答えか？」

「今はね。これからも迷いながらその都度見つけるよ」

「そうか」

見れば、ドッペルゲンガーだったものはどんどん見た目が曖昧になりつつあった。まるで夢から覚めるときみたいに、白んでいく。

「僕はもう君と別れて存在している理由がなくなった」

そう言い残した僕は、瞬きの内にその姿を完全に消していた。俺はしばらく呆然としてさっきまで僕がいたベッドの端を見つめる。そして、おもむろに立ち上がる。目的をもって。

ずっと、なぜドッペルゲンガーがベッドの端に座っているのか疑問だった。でも今ようやくわかった。ベッドの下を探ると、そこには埃を被った楽器ケースがあった。ギターだ。俺はケースの中からギターをゆつくりと取り出す。そして、ギターストラップを肩にかける。ずしりとした重みが懐かしく、心地よい。

ピックを掴む。今弾きたい曲は思いつかない。でも、身体が覚えていたものはあった。左手を弦に這わせ、押さえる。そして右手に持ったピックで鳴らす。その響きは、コードだった。